HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞 ： 名詞化の度合いに注目して
Author(s)	呉人, 惠
Citation	北方言語研究, 4, 43-64
Issue Date	2014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55118
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-4-05.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 4:43-64（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2014）

コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞
―名詞化の度合いに注目して―

呉 人 惠
（富山大学）

1. はじめに

本稿では，コリャーク語[1]の動作名詞[2]を派生する接尾辞 -ɣiŋən（以下，この接尾辞ならびに派生される名詞を GN とする）と，動作主・被動作主名詞[3]を派生する接尾辞 -jolqəl[4]（以下，この接尾辞ならびに派生される名詞を JQ とする）の形態的・統語的ふるまいの比較をとおし，これらの形式の名詞化に関して主に次の 2 点を論証する。

① GN と JQ は，形態的にも統語的にも名詞と同じようにふるまう一方で，従属節の述語（GN は名詞節述語，JQ は名詞修飾節述語）としても，義務や予定といったモーダルな意味を表わす主節の述語としても用いられる点で共通している。また，GN と JQ が担う主節述語＞従属節述語＞名詞項という文法的役割の順に，形態的にも統語的にも動詞らしさが失われ，名詞らしさが増大する点でも類似性を示す。

② GN と JQ の形態的，統語的特徴を比べると，JQ の方が，動詞らしさが大きいと考えられる特徴を持っている。このことは，動作名詞は動詞や形容詞の特徴をよりよく保持しているのに対し，主語・目的語名詞を含むそれ以外の名詞化（道具名詞，様態名詞，場所名詞，原因名詞など）は，統語的にはより名詞に近いふるまいをするとの Comrie and Thompson (1985:334) の主張に対する反例となりうる。

コリャーク語の記述言語学的な先行研究 (Zhukova 1972 など) では，GN，JQ については形態論的観点からの簡略な記述にとどまっており，名詞と動詞の混合カテゴリーとしての特性に着目したものは，管見のかぎりでは見当たらない。

ところで，定形動詞節を名詞句に変換するプロセスである名詞化は，定形動詞と通常の

[1] 本稿は，2010 年 9 月に科学研究費補助金（基盤研究（B））「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」（代表：津曲敏郎［北海道大学］，22320075）により，ロシア連邦ハバロフスク市でおこなった聞き取り調査，ならびに，2013 年 9 月に科学研究費補助金（基盤研究（C））「コリャーク語形容詞述語構造に関する記述・類型研究」（代表：呉人惠，22520394）により，同じくロシア連邦ハバロフスク市でおこなった聞き取り調査に基づき書かれたものである。調査には，Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955 年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ，女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお，本稿の対象となるコリャーク語は，チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり：/p, t, t', k, q, v, ɣ, ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/。/t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [tʃ]。

[2] Comrie and Thompson (1985:334) の名詞化の分類によれば，'action/state nouns' と呼ばれるものである。また，Koptjevskaja-Tamm (1993) では 'action nominal' と呼ばれている。

[3] Comrie and Thompson (1985) では，agentive nouns と objective noun として別々にあげられているが，-jolqəl は動作主・被動作主の両方を能格的に表わすため，このように統一した。

[4] この 2 つの接尾辞は，いずれも便宜的に絶対格単数形で示してある。

名詞句の中間的な性格を持つという特異性から，変形文法においても (Chomsky 1970, Lees 1960)，言語類型論においても(Comrie 1976, Comrie and Thompson 1985, Croft 1991, Koptjevskaja-Tamm 1993)，長らく議論の対象となってきた。とりわけ，言語類型論の立場からは，名詞化は定形性 (finiteness) [5]喪失の度合いにより言語間で変異することが指摘され(Givón 2001)[6], 名詞化の統語論的類型論の構築が試みられてきた（Koptjevskaja-Tamm 1993）。また，名詞化により失われる動詞のカテゴリーがどのような階層をなしているのかという観点からの研究も精緻化されてきた (Noonan 1985, Lehmann 1988, Croft 1991, Malchukov 2005)。さらに, そのような研究の中で, 名詞化が動詞からの脱カテゴリー化(decategorization) (Hopper and Thompson 1984) と名詞への再カテゴリー化 (recategorization) (Bhat 1994) の 2 つのプロセスを含んでいることも確認されてきた (Malchukov 2005)。

本稿で扱う GN と JQ は，定形動詞から名詞に近づいていく脱カテゴリー化と再カテゴリー化のプロセスの中で，定形動詞では見られなかった動詞的なモーダルな意味を新たに獲得することを示す好例であり，上述の②の点でも，従来の類型論的アプローチに一石を投じうる可能性をもっている。

加えて, すでに考察をおこなった JQ の名詞化の度合いならびに主文用法に関する知見（呉人 2011，Kurebito 2011, Kurebito 2013）を，動作名詞である GN のそれと比較することにより，動作名詞と動作主・被動作主名詞の名詞化の度合いに関する類型論的知見に切り込みを入れうる可能性がある。

以上をふまえ，本稿では，GN と JQ を次のような形態的・統語的基準から考察する。

A. 名詞としての数，格標示はどの程度可能か。
B. 名詞項になることができるか。
C. 従属節の述語になることができるか。
D. 主節の述語になることができるか。
E. 名詞項や付加詞をどのように取ることができるか。

これらの基準以外にも，ヴォイス，テンス，ムードなどの動詞の文法範疇の保持度に関する基準も考慮に入れる必要がある。GN, JQ ともに使役や逆受動などのヴォイスは保持されていること，相対テンスであること，ムードの標示がないことなどについてはおおよその見通しが立っている。ただし，まだ網羅的な調査ができていないため，本稿での言及は控える。

本稿の構成は以下のとおりである。まず，第 2 節でコリャーク語の名詞と動詞がどのように区分されうるのかを形態的，統語的両面から明確にする。次に第 3 節では，上述の 5

[5] ここでいう「定形性 (finiteness)」とは，Givón (1990:853) に従い，「節が典型的他動節に類似している度合い」を意味する。そこでは，結合価やテンス・アスペクト・モダリティなどは，定形性に関わる主たる統語的特徴であると考えられている。なお，定形性に関するより詳細な議論については，Nikolaeva (2007) を参照されたい。

[6] Givón (2001)は, すべての従属節が名詞化される「究極の名詞化言語 (extreme nominalizing language)」と，あらゆる節が定形で表わされる「究極の定形言語 (extreme finite language)」という対極の 2 つのタイプを設定している。

つの基準にもとづき，GN の形態的，統語的ふるまいを記述する。第 4 節では，JQ の形態的，統語的ふるまいを記述する。第 5 節では，第 3 節，第 4 節における記述をもとに，動作名詞と動作主・被動作主名詞の形態的・統語的異同の検討をとおして，名詞化の度合いを相互比較する。

ところで，コリャーク語には，これらの形式とは別に，格接辞を取るという点においてのみ名詞と共通する次のようないくつかの非定形動詞形式があるが，これらは本稿の考察の対象からは外すことを申し添えておく。これらの形式は，いずれも動詞語幹に直接，格接辞を取っていると考えられる，おそらく通言語的に見ても珍しい特徴を共有している。1) は，副詞節の述語が取る形式である。動詞語幹に場所格，道具格，与格，共同格などが付加されて，様々な節連接の意味を担う (Kurebito 2012)。2) は動詞語幹に場所格が付加され形成された不定形である。3) は動詞語幹に共同格が付加されて，主節述語として命令の意味を表わす形式である。

1) 副詞節: -k（=場所格）, -ŋ（=与格）, ɣejq-/ɣajq-..-(t)e/-(t)a（=共同格）
(e.g.) ewji-k「食べる時，食べれば」, ev-ə-ŋ「言うに」, ɣejq-ə-cetkejuŋ-e「考えながら」
2) 不定形: -k（=場所格）(Zhukova 1972:257)
(e.g.) ewji-k「食べること」
3) 命令: ɣe-/ɣa-..-te/-ta（=共同格）
(e.g) ɣa-tajk-ə-ŋvo-ta「（なにかを）作りなさい」

たしかに，これらの形式も格接辞を取りうるという点で名詞との類似性を示す。ただし，GN や JQ のようにそれ以外の点でも名詞としての文法的役割を担っているわけではない。したがって，これらを GN や JQ と同一に扱うことは適切ではないと考える。

さらに，JQ 同様に動作主・被動作主名詞を作る名詞化接尾辞に -lʔən がある。-lʔən は名詞項として用いられるだけでなく，名詞修飾節の現在あるいは過去の意味の述語として，未来を表わす JQ と相補分布をなすなど，本稿で扱う接尾辞とも類似性が高い（呉人 2008, Kurebito 2008）。ただし，主節の述語として用いられた場合の意味やふるまいについて異なる点，また現時点では十分に解明されていない点があるため，その分析は今後の課題とし本稿では扱わない。

2.　コリャーク語の名詞と定形動詞

まず，形態的な側面から名詞と定形動詞を区別する特徴を概観する。

2.1.　名詞の形態的特徴

名詞は，格，数，定性によって屈折する。格には，絶対格，場所格，道具格，与格，方向格，沿格，奪格，原因格，様態格，接触格，共同格，随格がある。定性は名詞句階層の高い名詞にのみ明示的に標示され，低い名詞には標示されない。また，定性が表示されない名詞の場合，数は絶対格においてのみ単数・双数・複数が区別され，斜格には数の区別

はない。一方，定性が標示される名詞の場合，絶対格では定性の標示を受けないが，それ以外の格において単数の定と複数の定が区別される。定性，格，数の文法範疇は，次のように配列される。スラッシュは 2 つの範疇が融合していることを示す。

(1)　不定名詞の屈折

絶対格：X－格／数

絶対格以外：X－格

(2)　定名詞の屈折

絶対格：X－格／数

絶対格以外：X－定性／数－格

具体例は，次表 1 を見られたい。jaja「家」は定性が標示されない階層の低い名詞，tata「お父さん」は定性が標示される階層の高い名詞である。

表 1　jaja 「家」と tata 「お父さん」の格の屈折パラダイム

	jaja 「家」	tata「お父さん」
絶対格	jaja-ŋa(SG) jaja-t(DU) jaja-w(PL)	tata-Ø (SG) tata-t (DU) tata-w (PL)
場所格	jaja-k	tata-na-k (SG) tata-jək (PL)
道具格	jaja-ta	
与格	jaja-ŋ	tata-na-ŋ(SG) tata-jək-ə-ŋ (PL)
方向格	jaja-jtəŋ	tata-na-jtəŋ (SG) tata-jəka-jtəŋ (PL)
沿格	jaja-jpəŋ	tata-na-jpəŋ (SG) tata-jəka-jpəŋ (PL)
奪格	jaja-ŋqo	tata-na-ŋqo (SG) tata-jəka-ŋqo (PL)
原因格	jaja-kjet	tata-na-kjet (SG) tata-jka-kjet (PL)
様態格	jaja-no	tata-na-no (SG) tata-cɣana-no (PL)
接触格	jaja-jeta	―――
共同格	ɣawən-n’a[7]-ma	―――

このような名詞句階層は，能格標示にも反映されている。コリャーク語は形態的能格タイプを示すが，能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで，その他の名詞では名詞句階層に応じて，場所格あるいは道具格が能格として用いられる。名詞は能格がどのような形式的標示を受けるかにより，大きく次の 4 つに分類される（呉人 2002）。

[7] n’a は，jaja の短縮形。n’ は，jaja の初頭の j が ɣawən- の n に同化したもの。

A)　独自の能格標識 **-nan** をもつ名詞
B)　能格に場所格 (**-k**) が援用され，同時に定の標示 **-ne**（単），**-jəka**（複）をうける名詞
C)　能格に道具格 (**-te**) が援用され，定の標示を受けない名詞
B/C)　能格として任意に場所格も道具格もとり，定の標示も任意である名詞

A) には人称代名詞，B) には人間や家畜の固有名詞，人称疑問代名詞，親族呼称，C) には，親族名称，動物名詞，無生物名詞，B/C) には，普通人間名詞，指示代名詞，「どの」を表す疑問代名詞などが含まれる（表 2 参照）。

表 2　コリャーク語の名詞句階層による能格標示の違い

	A	B	B／C	C
能格標識	-nan	-ne-k/-jəka-k	-ne-k/-jəka-k~-te	-te
名詞	人称代名詞	固有名詞 人称疑問代名詞「だれ」 親族呼称	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」	親族名称 動物名詞 無生物名詞

次の (3) は A の人称代名詞，(4) は B の場所格を取る固有名詞，(5) は C の定か不定により場所格も道具格も取る人間名詞，(6) は D の道具格を取る動物名詞の例である。

(3) Mocɣ-ə-nan　məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n　əjava-k
1PL-E-ERG　1PL.A-FUT-go.for-PL-FUT-E-3SG.O　remote.place-LOC
va-lʕ-ə-n　ineŋ-Ø.
be-NML-E-ABS.SG　cargo.sleigh-ABS.SG
「私たちはずっと向こうにある貨物用橇を取りに行こう」

(4) L’aŋe-na-k　tejk-ə-ni-n-Ø　icʕ-ə-n
Ljage-DEF.SG-LOC(ERG)　make-E-3SG.A-3SG.O-PF　fur.coat-E-ABS.SG
qlavol-ə-ŋ.
husband-E-DAT
「リャゲ（女性名）は夫に毛皮コートを縫った」

(5) El’ʕa-ta　/　El’ʕa-na-k　ɣəcci
woman-INSTR(ERG)　woman-DEF.SG-LOC(ERG)　2SG.ABS
ne-ku-ʕejŋew-wi.
INV-IPF-call-2SG.O
「ある女／その女がお前を呼んでいる」

(6) ŋanko　qoja-ta　ku-nu-ŋ-ni-n　pəʕo-n.
there　reindeer-INSTR(ERG)　IPF-eat-IPF-3SG.A-3SG.O　mushroom-ABS.SG
「あそこでトナカイがキノコを食べている」

2.2. 動詞の形態的特徴

次に動詞の形態的特徴について見る。動詞の文法範疇には，テンス・アスペクト，ムード，人称がある。動詞直説法の屈折形式は基本的には完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。ムードには，直説法，命令法，反実仮想法がある。自動詞では主語の，他動詞では主語と目的語の人称の標示がなされる。表 3 は自動詞 tawjiŋ「咳する」の直説法（1 人称単数主語）の，表 4 は他動詞 pŋəlo「尋ねる」の直説法（1 人称単数主語／3 人称単数目的語）の屈折パラダイムである。

表 3: 自動詞 tawjiŋ「咳する」の屈折パラダイム (1SG.S.IND)

非未来			未来
完了	結果相	アオリスト	
	ɣa-tawjiŋ-iɣəm	t-ə-tawjiŋ-ə-k	t-ə-ja-tawjiŋ-ə-ŋ
不完了	t-ə-ku-tawjiŋ-ə-ŋ		t-ə-ja-tawjiŋ-eke

表 4: 他動詞 pŋəlo「尋ねる」の屈折形式 (1SG.S/A;3SG.O.IND)

非未来			未来
完了	結果相	アオリスト	
	ɣa-pəŋlo-len-Ø	t-ə-pəŋlo-n-Ø	t-ə-ja-pŋəlo-ŋ-ə-n
未完了	t-ə-ko-pŋəlo-ŋ		t-ə-ja-pŋəlo-jk-ə-n

以上のように，名詞と定形動詞は相互に重なり合わない異なる文法範疇を持っている。

2.3. 統語的区別

次に，統語的な側面から名詞と動詞の特徴をみる。節構造からみると，典型的な名詞は S（自動詞主語），A（他動詞主語），O（他動詞目的語）といった名詞項になり，典型的な動詞は述語になるといわれる (Dixon 2010)。コリャーク語では名詞は名詞項になるだけでなく，動詞を介さずに述語にもなりうる。名詞が述語になる際には主語の人称が標示される。

(7) en’pici-jɣəm 「私は父親だ」
en’pici-muji 「私達 2 人は父親だ」
en’pici-muju 「私達は父親だ」
en’pici-jɣi 「君は父親だ」
en’pici-tuji 「君達 2 人は父親だ」
en’pici-tuju 「君達は父親だ」
en’pic-Ø 「彼は父親だ」
en’pici-t 「彼ら 2 人は父親だ」
en’pici-w 「彼ら（3 人以上）は父親だ」

3. 動作名詞 GN の名詞化の度合い

GN は，動詞語幹に接続して「～すること」という意味を表わす動作名詞を派生する。自動詞語幹にも他動詞語幹にも生産的に接続し，自動詞語幹に接続した場合には主語と，他動詞語幹に接続した場合には目的語と一致する。(8) は自動詞語幹からなる GN である。

(8)　自動詞語幹

wejcet-ɣiŋ-ə-n「徒歩」	←	wejcet「徒歩で行く」
jonat-ɣiŋ-ə-n「生活」	←	jonat「暮らす」
ojecvat-ɣiŋ-ə-n「遊び」	←	ojecvat「遊ぶ」
qojalʕat-ɣiŋ-ə-n「夏の遊牧」	←	qojalʕat「夏の遊牧をする」
ɣakaŋəlʕat-ɣiŋ-ə-n「橇の旅」	←	ɣakaŋəlʕat「橇で行く」
l'ajvətko-ɣiŋ-ə-n「歩き」	←	l'ajvətko「歩く」
elɣətaw-wiŋən「洗顔」	←	elɣətaw「洗顔する」[8]

一方，(9) は他動詞語幹からなる GN である。

(9)　他動詞語幹

jawjat-ɣiŋ-ə-n「を養うこと」	←	jawjat「養う」
japlajtat-ɣiŋ-ə-n「をブーツ履かせすること」	←	japlajtat「ブーツを履かせる」

以下では，GN は，①格・数標示が可能か，②名詞項になれるか，③従属節の述語になれるか，④主節の述語になれるか，⑤述語になる場合，名詞項や付加詞をどのように取ることができるかに着目して，名詞化の度合いを考察する。

3.1.　格・数標示

まず，GN がどの程度，名詞の形態的特徴を獲得しているかを，数・格標示に注目してみてみる。GN には格・数いずれも標示されうるが，典型的な名詞のようには完全ではない。一例を見てみよう。ojecvat-ɣiŋ-ə-n「遊び」は，数は，典型的な名詞同様，絶対格において単数・双数・複数が区別される (10)。

(10)　ojecvat-ɣiŋ-ə-n（絶単）/ojecvat-ɣiŋ-ə-t（絶双）/ojecvat-ɣiŋ-o（絶複）

一方，格は絶対格以外に場所格，道具格，与格，原因格が標示される。しかし，それ以外の方向格，沿格，奪格，様態格，共同格の標示は許容されない。

(11)　ojecvat-ɣiŋ-ə-k（場所格）/ojecvat-ɣiŋ-a（道具格）/ojecvat-ɣiŋ-ə-ŋ（与格）/ojecvat-ɣiŋ-ə-kjet（原因格）
*ojecvat-ɣiŋ-etəŋ（方向格）/*ojecvat-ɣiŋ-epəŋ（沿格）/*ojecvat-ɣiŋ-o（様態格）/*ɣawən-ojecvat-ɣiŋ-ə-ma（共同格）

ただし，すべての GN が数・格標示において ojecvat-ɣiŋ-ə-n「遊び」と同様のふるまいをするわけではない。単数形のみが可能な GN，双数形，複数形も可能な GN がある。たとえば，(12a) の kalecet-ɣiŋ-o「授業」は自動詞 kalecet「学ぶ」から派生した GN であるが，複数形が可能である。ただし，上述の kalecet-ɣiŋ「授業」は，「勉学」という意味ももつが，その場合には単数形 kalecet-ɣiŋ-ə-n しか許容されない。一方，(12b) の wajcet-ɣiŋ-ə-n「歩き

[8] -wiŋ は，**-ɣiŋ** の初頭の**ɣ** が elɣətaw の語幹末の w に同化した異形態。

方」，(12c) の jonat-ɣiŋ-ə-n「生活」は修飾語が複数形であるにもかかわらず，これと一致せずに単数のままである。このことから，意味の抽象性が GN の数標示のかかわっている可能性が推測される。

(12) a. əcɣ-in kalecet-ɣiŋ-o
3PL-GEN study-GN-ABS.PL
「彼らの授業」

(12) b. kəmiŋ-ə-cɣ-in wajcet-ɣiŋ-ə-n
child-E-PL-GEN walk-GN-E-ABS.SG
「子供たちの歩き方」

(12) c. ʕujemtevilʕ-ə-cɣ-in jonat-ɣiŋ-ə-n
人-E-PL-GEN live-GN-E-ABS.SG
「人々の生活」

3.2. 名詞項

GN は文中において，名詞項や斜格名詞になることができる。(13)(14) は GN 形が S の例である。

(13) Qojalʕat-ɣiŋ-ə-n inʕe k-ejmev-ə-ŋ.
summer.nomadism-GN-E-ABS.SG soon IPF-approach-E-IPF-3SG.S
「夏の遊牧がもうじき近づいている」

(14) Qojalʕat-ɣiŋ-o ɣemɣe-ŋelvəlʕ-ə-k metʕaŋ
summer.nomadism-GN-ABS.PL every-herd-E-LOC well
k-el-la-ŋ-Ø.
IPF-be-PL-IPF-3S
「夏の遊牧はすべてのトナカイの群れでうまくいっている」

(15) は GN が目的語として絶対格を取る例である。

(15) Kali-k ɣa-kali-lin-Ø ɣeŋətko-ɣiŋ-ə-n.
book-LOC RES-write-3SG.O-3SG.S net.fish-GN-E-ABS.SG
「本に網漁のことが書いてある」

一方，(16)(17)(18) は GN が斜格で現れた例である。(16) は道具格，(17) は与格，(18) は原因格を取っている。

(16) Ojecvat-ɣiŋ-a ɣəmmo juleq ŋanko
play-GN-INSTR 1ABS.SG for.a.long.time there
t-ə-tva-k-Ø.
1SG.S-E-be-1SG.S-PF
「遊びで私は長いことあそこにいた」

(17) Ɣəmmo ojecvat-ɣiŋ-ə-ŋ t-ə-jiʕet-ə-k-Ø.
1ABS.SG play-GN-E-DAT 1SG.S-E-be.glad-E-1SG.S-PF
「私は遊びに喜んだ」

(18) Kəmiŋ-ə-t ojecvat-ɣiŋ-ə-kjit ɣe-jkuj-linet.
child-E-ABS.DU play-GN-E-CAUS RES-fight-2DU.S
「二人の子供は遊びが原因で喧嘩した」

GN は，定形動詞と同様に名詞項や付加詞を取りながら，それ自体，名詞項として機能することもできる。(19) では，自動詞語幹 ewwece「飲む」から派生された主語 ewwece-ɣiŋ-ə-n「飲む（自動詞）こと」は道具格 miml-e「水を」を取っている。通常，目的語は絶対格を取るが，ewwece は自動詞語幹であるため，目的語は斜格（すなわちここでは道具格）を取っていることに注意されたい[9]。(20) では，目的語 qət-ɣiŋ-ə-n「行くこと」が，道具格の mašina-ta「車で」と方向格の wojv-etəŋ「村へ」を取っている。(21) では，目的語 jonat-ɣiŋ-ə-n「生活」が場所格の wujv-ə-k「村で」を取っている。

(19) Ewwece-ɣiŋ-ə-n imə-jeq miml-e, jeqqə-qun ʕatkeŋ.
drink-GN-E-ABS.SG various water-INSTR very bad
「いろんな水（＝酒）を飲むのは非常によくない」

(20) Kəmiŋ-a mašina-ta qət-ɣiŋ-ə-n wojv-etəŋ
child-INSTR(ERG) car-INSTR go-GN-E-ABS.SG village-ALL
ɣa-nn’əɣal-len-Ø.
RES-let.pass-3SG.O-3SG.A
「子供は村に車で行くのをやり過ごしてしまった」

(21) Ɣəmnan cetkejuŋ-o t-ə-ku-lŋ-ə-ŋ-ə-n
1SG(ERG) think-ESS 1SG.A-E-IPF-regard-E-IPF-E-3SG.O
jonat-ɣiŋ-ə-n mejŋ-ə-wujv-ə-k.
live-GN-E-ABS.SG big-E-village-E-LOC
「私は大きな村で生活することを考えている」

ただし，GN の S にあたる名詞項は絶対格で現れることはできず，属格を取る。

(22) Ɣəmnin kalecet-ɣiŋ-ə-n t-ə-kali-n-Ø an’pece-jək-ə-ŋ.
1SG.GEN study-GN-E-ABS.SG 1SG.A-E-write-3SG.O-PF father-PL-E-DAT
「私は勉学について両親に手紙を書いた」

(23) Kəmiŋ-in wajcet-ɣiŋ-ə-n teqən en’pic-in.
child-GEN walk-GN-E-ABS.SG like father-GEN
「子供の歩き方は父親の（歩き方）のようだ」

(24) Ɣəmnin jeŋalʕat-ɣiŋ-ə-n ɣemɣenkəjij ewənʕat en’pici-jək
1SG.GEN fly-GN-E-ABS.SG everywhere anyway father-PL.LOC(ERG)

[9] ちなみに，ewwece「飲む」には対応する異根の他動詞 lp がある。lp では主語は能格，目的語は絶対格を取る。

ʕenq-u ne-ku-lŋ-ə-ŋ-ə-n.
dislike-ESS INV-IPF-regard-E-IPF-E-3SG.O
「私があちこちに飛ぶことを両親はいずれにしてもよく思っていない」

3.3. 名詞節述語

GN は，名詞節の述語になることができる[10]。その際，主語は属格で現れる。また，斜格名詞を取ることも可能である。ただし，自動詞主語あるいは他動詞目的語の人称は標示しない。(25) の例からは，主語が「私たち」であるにもかかわらず，名詞述語（例 : enipici-muju「私たちは父親だ」）のような人称標示は受けていないことがわかる。

(25) Tite mucɣin pəl’ətko-ɣiŋ-ə-n vetat-ə-k wujv-ə-k qiŋən
when our finish-GN-E-ABS.SG work-E-INF village-E-LOC it.turned.out
kali-k ɣa-kali-lin-Ø.
paper-LOC RES-write-3SG.O-3SG.A
「私達が村でいつ仕事が終わるのかは，どうやら紙に書いてあるようだ」

(26) Ɣəmnan ujŋe liɣi e-lŋ-ə-ke tite ənin
1SG.ERG not know not-regard-E-not when 3SG.GEN
malawja-k kəmeŋat-ɣiŋ-ə-n.
hospital-LOC give.birth-GN-E-ABS.SG
「私は彼女が病院でいつ子供を産むのか知らない」

一方，副詞節では述語になることができない。その場合には，必ず定形動詞とともに現れ，その主語となる。

(27) Tite jeŋa-ɣiŋ-ə-n je-nʕel-ə-ŋ-Ø, vitku
when fly-GN-E-ABS.SG FUT-become-E-FUT-3SG.S for.the.first.time
t-ə-je-ʕeqev-ə-ŋ wujv-etəŋ.
1SG.S-E-FUT-depart-E-FUT village-ALL
「飛ぶ時になったら，私は村に出発しよう」

(28) Tite kəmeŋat-ɣiŋ-ə-n je-jmev-ə-ŋ-Ø, vitku
when give.birth-GN-E-ABS.SG FUT-approach-E-FUT-3SG.S for.the.first.time
t-ə-je-lqət-ə-ŋ malawja-jtəŋ.
1SG.S-E-FUT-go-E-FUT hospital-ALL
「出産が近づいたら，私は病院に行こう」

[10] この他，形容詞語幹からなる GN には次のように名詞修飾機能が観察されるが，名詞化 GN の場合についてはまだ調べがついていないため，本稿では言及を控える。
ɣəcci jeqqe=qun aŋenm-ə-ɣiŋ-eɣe ʕujemtewilʕ-iɣi.
2SG.ABS very.much interesting-E-NML-2SG.S person-2SG.S
「君はとても面白い人だ」

3.4.　主節述語

GN は，定形動詞と同様に名詞項を取り，述語としてふるまうことができる。定形動詞の場合同様，自動詞語幹についた場合に主語が，他動詞語幹についた場合には目的語が絶対格を取り，義務というモーダルな意味を表わす。この場合にも，斜格名詞や副詞などの付加詞を取ることもできる。また，やるべき行為に対して否定的なニュアンスが込められた副詞 ekil「その上」としばしば共起する。

(29) は自動詞語幹からなる GN である。主語は明示されていないが，道具格や方向格を取っている。(30)(31) では，主語がそれぞれ，絶対格 ənno「彼／彼女」，ɣəmmo「私」で現れていると同時に, GN がこれに一致して人称を標示している点で (7) で示した名詞述語とふるまいが同じである。したがって，GN が主節述語になる場合の語末の-n は，他の人称標示と平行して 3 人称単数主語あるいは 3 人称単数目的語を表わす標識と解釈する。

なお，tajaŋ「家を作る」は，上述のとおり，目的語にあたる名詞語幹 ja「家」が語彙的接周辞 ta-..-ŋ と結合した形式で，自動詞である。

(29)　Ekil　　mašina-ta　qət-ɣiŋ-ə-n　　wojv-etəŋ.
　　moreover　car-INSTR　go-GN-E-3SG.S　village-ALL
　　「その上，彼／彼女は車で村に行かなければならない」

(30)　Ekil　　ənno　　ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-n.
　　moreover　3SG.ABS.　make-house-make-GN-E-3SG.S
　　「その上，彼／彼女は家も建てなければならない」

(31)　Ekil　　ɣəmmo　　ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-ɣəm.
　　moreover　1SG.ABS　make-house-make-GN-E-1SG.S
　　「その上，私は家を建てなければならない」

自動詞語幹＋GN で受益者が現れる場合，受益者は与格を取る。(32) の vəʕajpaje は，目的語にあたる名詞語幹 vəʕaj「草」が他動詞語幹 paje「刈る」に抱合され，自動詞化した例である。

(32)　Ekil　　ənno　　an’pec-ə-ŋ　　vəʕaj-paje-ɣiŋ-ə-n.
　　moreover　3ABS.SG　father-E-DAT　grass-reap-GN-E-3SG.S
　　「その上，彼は，父親に草刈りをしてやらなければならない」

一方，他動詞語幹から派生された GN の場合には，目的語は絶対格を取るが，主語は明示されないか，能格ではなく与格を取る。(33) は，目的語にあたる ujetik「橇」は絶対格を取っているが，主語は明示されていない例である。述語の方の tajk-ə-ɣiŋ-ə-n の -n は主語ではなく，目的語 ujetik-Ø「橇」と能格的な一致を示しているため，ここでも主語の人称・数は明示されない。

(33)　Ənnen　ujetik-Ø　　ɣəmleŋ　tajk-ə-ɣiŋ-ə-n.
　　one　　sledge-ABS.SG　again　　make-E-GN-E-3SG.O
　　「ひとつの橇をもう一度修理しなければならない」

(34) は，目的語が絶対格，主語の「私」が与格を取っている例である。能格からさらに降格した与格主語を取るこのような構文は，通常の定形動詞文では見られない。

(34) Ekil ɣəmkəŋ ɣəcci jawjat-ɣiŋ-eɣe.
moreover 1SG.DAT 2SG.ABS feed-GN-2SG.O
「そのうえ，私にはお前を食べさせなければならないのだ」

(35) Ɣəmle ŋano cakok-na-ŋ elɣətaw-wiŋ-ə-n
again this sister-DEF.SG-DAT wash-GN-E-3SG.O
kəmiŋ-ə-n, məjew unmək ɣe-tqeŋu-lin.
child-E-ABS.SG because very RES-get.dirty-3SG.S
「子供はとても汚れたので，妹はまた彼を洗ってやらなければならない」

3.5. まとめ

以上，GN の形態的・統語的特徴をまとめると次のようになる。

① 語によって違いはあるが，単数・双数・複数の数標示，絶対格，場所格，与格，原因格の格標示が見られる。ただし，典型的な名詞と比較すると制限がある。
② 文中で名詞項になれる。
③ 名詞節の述語になれる。人称標示は受けず，絶対格で現れる。
④ 主節の述語になれる。その場合，義務の意味を表わす。自動詞主語あるいは他動詞目的語の人称標示を受ける。
⑤ 名詞項，名詞節述語，主節述語いずれになる場合でも，名詞項や付加詞を取りうる。ただし，名詞項の現れ方は一様ではない。すなわち，目的語は定形動詞同様，いずれの場合にも絶対格で現れる。その一方で，名詞項や従属節述語になる場合には，主語は属格を取るが，主節述語になる場合には，与格を取る。

4. 動作主・被動作主名詞 JQ の名詞化の度合い

JQ は，自動詞語幹につけば動作主（主語），すなわち，「～する主体となるはずの（あるいは，はずだった）もの」，他動詞につけば被動作主（目的語），すなわち，「～する対象となるはずの（あるいは，はずだった）もの」の意味を表わす。JQ 接尾辞は，-jo と-lqəl という 2 つの接尾辞に分析される複合接尾辞である。-jo は，Zhukova (1972) では他動詞語幹に接続する名詞化接辞であると記述されているが，実際には自動詞語幹に接尾して主語 (36)，他動詞語幹に接辞して目的語 (37) を表わす。

(36) 自動詞語幹+ -jo
jeŋa-jo-n「飛ぶはずのもの」 ← jeŋa「飛ぶ」
qeto-jo-n「凍ったもの」 ← qeto「凍る」

(37) 他動詞語幹+ -jo
təm-jo-n「屠殺体」 ← təm「殺す」
tajk-ə-jo-n「作ったもの」 ← tajk「作る」
ɣeta-jo-n「見ていた対象」 ← ɣeta「見る」

tenaŋaŋ-jo-n「橇に積荷したもの」　← tenaŋaŋ「橇に積荷する」
joʕ-ə-jo-n「得たもの」　← joʕ「得る」
kəpl-ə-jo-n「叩いた対象」　←kəpl「叩く」
pela-jo-n「残した対象」　←pela「残す」
joʕ-ə-jo-n「得る対象＝目的」　←joʕ「得る」
jənŋaw-jo-n「育てる対象＝苗」　←jənŋaw「育てる」

一方，-lqəl は，名詞語幹に接尾して，「～の予定のもの，～を作るための材料，～になるべきもの」などの意味を表わす (38) （-Ø は絶対格単数標識）。

(38) ja-lqəl-Ø「家を建てるための材料＝柱」 ←ja「家」
cawat-ə-lqəl-Ø「投げ輪を作る材料」 ←cawat「投げ輪」
wala-lqəl-Ø「ナイフを作る材料」 ←wala「ナイフ」
pəʕatʕo-lqəl-Ø「干し魚を作る材料」 ←pəʕatʕo「干し魚」

この -lqəl に -jo が前接した JQ は能格的にふるまい，自動詞語幹につけば主語，すなわち，「～する主体となるはずの（はずだった）もの」(39)，他動詞につけば目的語，すなわち，「～する対象となるはずの（はずだった）もの」(40) の意味を表わす。

(39) va-jo-lqəl-Ø「いるはずの（はずだった）者」 ←va「いる」
jeŋa-jo-lqəl-Ø「飛ぶはずの（はずだった）者」 ←jeŋa「飛ぶ」
(40) ʕajŋaw-jo-lqəl-Ø「呼ぶはずの（はずだった）対象」←ʕajŋaw「呼ぶ」
təm-jo-lqəl-Ø「殺すはずの（はずだった）対象」 ←təm「殺す」

Zhukova (1972) では，JQ は出動名詞のひとつとして略述されているのみであるが，実際には，次に見るように名詞項，名詞修飾句・名詞修飾節述部，主節述部という 3 つの文法機能をあわせもつ。

4.1. 格・数標示

JQ は格・数標示を受ける。絶対格においては単数，双数，複数が区別される。(41) は jac「来る」に JQ がついた「来るはずの人」が単数，双数，複数で現れている例である。

(41) jac-colqəl-Ø（絶単）/ jac-colqəl-te（絶双）/ jac-colqəl-o（絶複）

格標示は絶対格と場所格に限られており，その他の斜格で現れることはできない。

(42) jac-colqəl-ə-k（場所格）/* jac-colqəl-a（道具格）/* jac-colqəl-ə-ŋqo（奪格）など

4.2. 名詞項

JQ は名詞項になることができる。(43)(44) は自動詞主語となった例，(45)(46) は他動詞目的語となった例である。いずれも絶対格を取っており，(43)(45) は単数形，(44) は複数形，(46) は双数形であることにも注意されたい。なお，例文では -jo-lqəl は，便宜的に分析せずに -jolqəl とし，JQ とグロスを付す。

(43) Taŋataw-jolqəl-Ø jeppə ku-jəlqet-ə-ŋ-Ø.
get.dressed-JQ-ABS.SG yet IPF-sleep-E-IPF-3SG.S
「身支度するはずの人はまだ寝ている」

(44) Jac-colqəl[11]-o ecɣi ŋelvəlʕ-ə-k teqən
come-JQ-ABS.PL now reindeer.herd-E-LOC seemingly
ko-qoja-ɣijke-la-ŋ-Ø.
IPF-reindeer-catch-PL-IPF-3S
「来るはずの人たちは，今，群れでトナカイを捕まえているようだ」

(45) Ɣəm-nan təne-jolqəl-Ø t-ə-ntəmŋev-ə-n-Ø.
1SG-ERG sew-JQ-ABS.SG 1SG.A-E-lose-E-3SG.O-PF
「私は縫うはずの物を失くしてしまった」

(46) Ə-nan awja-jolqəl-te ku-ʕejŋəw-ŋ-ə-ni-n.
3SG-ERG eat-JQ-ABS.DU IPF-call-IPF-E-3SG.A-3DU.O
「彼／彼女は食べるはずの（2 人の）人を呼んでいる」

(47) は JQ が場所格で用いられた例である。

(47) Jeŋa-jolqəl-ə-k mitiw ɣe-minnine-te.
fly-JQ-E-LOC tomorrow IMPR-join-IMPR
「明日，飛ぶはずの人に加わりなさい」

JQ は名詞項として用いられる場合，名詞項や付加詞を取ることができる。ただし，(48) で見るように，他動詞語幹の主語にあたる語は定形動詞文に見られる能格ではなく属格で現われる。一方，(49) で見るように，斜格名詞は定形動詞と同じ形式で取ることができる。

(48) Ɣəmnin ʕajŋaw-jolqəl-Ø miŋkəje amu ɣe-lq-ə-lin.
1SG.GEN call-JQ-ABS.SG where probably RES-leave-E-3SG.S
「私が呼ばなければならなかった人は，多分どこかに行ってしまった」

(49) Magadan-etəŋ jeŋa-jolqəl-Ø jeppə ko-tva-ŋ-Ø ŋelvəlʕ-ə-k.
Magadan-ALL fly-JQ-ABS.SG yet IPF-be-IPF-3SG.S reindeer.herd-E-LOC
「マガダンに飛ぶはずの人は，まだ群れにいる」

4.3. 名詞修飾節述語

JQ は，名詞修飾句としても名詞修飾節の述部としても用いられる。名詞修飾句の場合には，JQ が単独で主要部名詞を修飾するが，名詞修飾節では，JQ 自体が節の述部として他の名詞項や付加詞を取り，主要部名詞を修飾する。ただし，句か節かの違いは主にこのように名詞項や付加詞を取るかどうかだけであり，両者には形態的・統語的にそれ以外の本質的違いは認められない。したがって，ここでは両者を区別して扱うことはしない。

JQ が名詞修飾句・名詞修飾節の述部となる場合，自動詞語幹から派生されると主語，他

[11] jac-colqəl は，基底形の **jet-jolqəl** の形態素境界の **t** と **j** が同化を起こしたもの。

動詞語幹から派生されると目的語がその主要部名詞となる。JQ はそれ以外の名詞項を主要部名詞として取ることはできない（呉人 2008, Kurebito 2008）。すなわち，JQ が取れる格は単独の名詞項として用いられる JQ よりもさらに制限され，絶対格のみである。

次に取りうる名詞項と付加詞について見ると，名詞項の JQ と異なり，名詞項，すなわち他動詞主語は定形動詞同様の能格標示を受けることができること，付加詞としては斜格名詞だけでなく副詞も取りうること，さらに副動詞をともないうることなどが観察される。

まず自動詞語幹からなる JQ について見る。次の (50) は自動詞語幹 ŋajqətva「掃除する」から派生された JQ 名詞句であるが，斜格名詞や副詞を取ることで，(51)(52) のような名詞修飾節に拡張される。例では下線部が主要部名詞，[　] で括った部分が名詞修飾節である。節に含まれる語が多くなると，(52) のように，主要部名詞と名詞修飾節の間に，話者が聞き手にとってすでに既知である陳述内容を，聞き手に想起させる機能をもつ間投詞 ʕamin が挿入されることに注意されたい。

(50) 【名詞修飾句】

Əccaj-Ø　[ŋajqətva-jolqəl-Ø]　pəce　ajm-e-Ø.
ant-ABS.SG　clean-JQ-ABS.SG　first　go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

(51) 【名詞修飾節】

Əccaj-Ø　[jaja-k　ŋajqətva-jolqəl-Ø]　pəce　ajm-e- Ø.
ant-ABS.SG　house-LOC　clean-JQ-ABS.SG　first　go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「家で掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

(52) 【名詞修飾節】

Əccaj-Ø,　[ʕamin　ecɣi　jaja-k　ŋajqətva-jolqəl-Ø]
ant-ABS.SG　INTRJ　today　house-LOC　clean-JQ-ABS.SG
pəce　ajm-e-Ø.
first　go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「今日，家で掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

さらに，自動詞語幹から形成された JQ が奪格名詞，共同格名詞，時間副詞を取っている次例 (53) も見られたい。

(53)　Qajəkmiŋ-ə-n,　[ʕamin　mitiw　jamk-ə-ŋqo
boy-E-ABS.SG　INTRJ　tomorrow　neighboring.brigade-E-ABL
jac-colqəl-Ø　ɣe-tumɣ-e]　ko-ncocmaw-ŋ-ə-ne-n
come-JQ-ABS.SG　COM-friend-COM　IPF-prepare.for-IPF-E-3SG.S-3SG.O
ujetik-Ø.
sledge-ABS.SG
「明日，隣のブリガードから友達と一緒に来るはずの少年は，橇を準備している」

次に，他動詞語幹から派生された名詞修飾句・名詞修飾節の JQ を見る。主要部名詞は，他動詞の目的語である。(54) は名詞修飾句であるが，(55) では，他動詞主語が能格で標示

され，時間副詞 mitiw「明日」をともなって，名詞修飾節として拡張している。

(54) 【名詞修飾句】

kalikal [akmec-colqəl-Ø]

book(ABS.SG) buy-JQ-ABS.SG

「買う予定の本」

(55) 【名詞修飾節】

kalikal, [ʕamin ɣəm-nan mitiw akmec-co-lqəl-Ø]

book(ABS.SG) INTRJ 1SG-ERG tomorrow buy-JQ-ABS.SG

「私が明日買う予定の本」

次の (56) では，他動詞語幹から派生された JQ が，主語（能格），時間副詞，さらには副動詞とともに名詞修飾節をなしている。

(56) Wala-Ø, [ʕamin mitiw ʕojacek-a java-jolqəl-Ø

knife-ABS.SG INTRJ tomorrow man-INSTR(ERG) use-JQ-ABS.SG

qoja-nm-at-ə-k], qiŋən ɣa-ntəmŋaw-len-Ø en'pici-te.

reindeer-kill-AP-E-CONV likely RES-lose-RES+3SG.S-3SG.O father-INSTR(ERG)

「明日，牧夫がトナカイを殺す時に使うナイフはどうやら父が失くしたようだ」

ただし，次のように属格を取っている例も (57) に見るように，1 例だけであるが観察されており，名詞修飾句・名詞修飾節では他動詞主語の取る格には能格か属格かでゆれが見られることがうかがえる。このようなゆれの要因については今のところ明らかではないが，(58) では上例とは異なり，他動詞主語が文頭に属格形で現われていること，主要部名詞が名詞修飾節に後置されていることに注目しておきたい。

(57) [ɣəmnin təne-jolqəl-Ø] icʕ-ə-n t-ə-ntəmŋev-ə-n-Ø.

1SG.GEN sew-JQ-ABS.SG fur.coat-E-ABS.SG 1SG.S-E-lose-E-3SG.O-PF

「私の縫う予定の毛皮上着を私は失くしてしまった」

ところで，主節内での主要部名詞の統語的役割は JQ 名修飾句あるいは節の形成にはなんら影響を与えない。そのため，(58)(59) に見るように，主要部名詞と JQ は取る格が異なることもありうることに注意されたい[12]。

---

[12] 一方、同系のチュクチ語では、後述する LH（チュクチ語では -lʔ）が主節内での主要部名詞の統語的役割に呼応して格変化する例が報告されている (Comrie 1981:110)。一般に主要部名詞の主節での統語的役割が関係節形成の可能性や使用される特定の関係節構造の違いに対して影響を与えないと言われていることを考えると (Comrie 1981:146)、チュクチ語のふるまいはむしろ特異である。(i)では主要部名詞 ʔaaćek が能格を取るのに呼応して、LH も能格で現われている。

(i) En-aɣtat-kə-lʔ-a qaa-k ʔaaćek-a vinretərkəninet ŋevəćqetti.

AP-chase-NEG-PART-ERG reindeer-LOC youthe-ERG he-helps-them women-ABS

'The youth who does not chase the reindeer is helping the women.' (Comrie 1981:110)

次の (ii) では、主要部名詞 enm「山」の方向格に呼応して、LH 分詞も方向格を取っている。

(ii) Iɣər a-yoʔ-kə-lʔ-etə enm-etə mənəlqənmək.

now NEG-reach-NEG-PART-ALL hill-ALL let-us-go

(58) Qajəkmiŋ-a, [ʕamin mitiw jac-colqəl-Ø],
boy-INSTR(ERG) INTRJ tomorrow come-JQ-ABS.SG
ko-ncocmaw-ŋ-ə-ne-n ujetik-Ø.
IPF-prepare.for-IPF-E-3SG.A-3SG.O sledge-ABS.SG
「明日来る予定の少年は，橇を用意している」

(59) Q-ə-jəl-Ø ɣənin wala-Ø ʕojacek-ə-ŋ, [ʕamin
2SG.A/IMPR-E-give-3SG.O 2SG.GEN knife-ABS.SG man-E-DAT INTRJ
mitiw jac-colqəl-Ø ŋelvəlʕ-ə-ŋqo].
tomorrow come-JQ-ABS.SG reindeer.herd-E-ABL
「明日，家畜トナカイの群れから来るはずの男にお前のナイフをやりなさい」

4.4. 主節述語

以上の用法に加え，JQ は主節述部として現われ，「～しなければならない（～しなければならなかった）」というモーダルな意味を表わす。この場合，JQ は，(3) でみた通常の名詞述語同様に，人称・数の標識をもつ。すなわち，自動詞ならば主語の，他動詞ならば目的語の人称・数を表わす接尾辞を伴う。(60) は JQ が述語（同格も同様）として用いられる場合の語形変化のパラダイムである。なお，動詞語幹は va「いる」という自動詞である。

(60) va「いる」から派生した JQ 述語のパラダイム

1 単主	va-jolqəl-iɣəm	「私はいなければならない」
1 双主	va-jolqəl-muji	「私達 2 人はいなければならない」
1 複主	va-jolqəl-muju	「私達（3 人以上）はいなければならない」
2 単主	va-jolqəl-iɣi	「貴方はいなければならない」
2 双主	va-jolqəl-tuji	「貴方達 2 人はいなければならない」
2 複主	va-jolqəl-muju	「貴方達はいなければならない」
3 単主	va-jolqəl-Ø	「彼はいなければならない」
3 双主	va-jolqəl-te	「彼ら 2 人はいなければならない」
3 複主	va-jolqəl-o	「彼らはいなければならない」

JQ が主節述語となる場合，格標示は受けない。

一方，名詞項や付加詞は定形動詞同様の形式で取ることができる。すなわち，他動詞主語は常に能格で現われ，上述の名詞修飾句・名詞修飾節のような属格と能格との間のゆれは観察されない。また，斜格名詞だけでなく，時間副詞などとも共起できる。

次の (61)(62) は自動詞語幹からなる JQ 述語，(63)(64) は他動詞語幹からなる JQ 述語の例である。

'Now let us go to the hill which (someone) did not reach.' (Comrie 1981:110)

(61) Ɣəcci ecɣi va-jolqəl-eɣe ɣ-en’pici-te jaja-k.
2SG.ABS today be-JQ-2SG.S COM-father-COM house-LOC
「あなたは今日，父と家にいなければならない」

(62) əccu awje-jolqəl-o awje-ja-k.
3PL.ABS eat-NML-to.be-3PL.S eat-house-LOC
「彼らは食堂で食べなければならない」

(63) Ɣəm-nan inʕe ʕajŋaw-jolqəl-Ø qajəkmiŋ-ə-n.
1SG-ERG soon call-NML-to.be-3SG.O boy-E-ABS.SG
「私は少年をすぐに呼ばなければならない」

(64) mitiw ɣ-ə-nan ŋelvəlʕ-ə-ŋqo jəle-jolqəl-Ø
tomorrow 2SG-E-ERG reindeer.herd-E-ABL bring-JQ-3SG.O
təm-jo-n.
kill-NML-ABS.SG
「お前は明日，群れから殺したトナカイを持ってこなければならない」

4.5. まとめ

以上，JQ の形態的，統語的特徴をまとめると，次のようになる。

① 単数・双数・複数の数標示は可能である。一方，格標示は，絶対格，場所格のみ可能である。
② 文中で名詞項になれる。
⑥ 名詞節の述語になれる。 人称標示は受けず，絶対格で現れる。
⑦ 主節の述語になれる。その場合，義務の意味を表わす。自動詞主語あるいは他動詞目的語の人称標示を受ける。
③ 名詞項，名詞節述語，主節述語いずれになる場合でも，名詞項や付加詞を取りうる。ただし，名詞項の現れ方は一様ではない。すなわち，目的語は定形動詞同様，いずれの場合にも絶対格で現れる。一方，JQ が文中で名詞項である場合，それが取る主語は属格になる。名詞修飾節述語になる場合には大体の場合，能格を取るが，例外的に属格を取ることもある。主節述語になる場合には，主語は能格を取る。

5. 考察

以上，コリャーク語の動作名詞 GN と動作主・被動作主名詞 JQ の名詞化の度合いを検討してきた。ここで GN と JQ に関し明らかになった点を表示したい。

表 5　GN と JQ の形態的・統語的特徴

	文法的役割	数	格	人称	自動詞主語	他動詞主語
GN	名詞項	単双複	絶対格 場所格 道具格 与格 原因格	---	属格	属格
JQ		単双複	絶対格 場所格	---	属格	属格
GN	従属節述語	---	絶対格	---	属格	属格
JQ		---	絶対格	---	属格	能格（～属格）
GN	主節述語	---	---	自主 他目	絶対格	与格
JQ		---	---	自主 他目	絶対格	能格

表 5 から，GN と JQ に共通して見られる形態的・統語的特徴（白い部分）は次の点であることがわかる。

(A) GN, JQ ともに名詞項，従属節述語，主節述語になる。
(B) 格・数標示ならびに人称標示，主語の取る格などを見ると，主節述語＞従属節述語＞名詞項の順に動詞らしさが弱化し，名詞らしさが現れる。
(C) 名詞項 GN, JQ では単数・双数・複数が区別される。
(D) 名詞項 GN, JQ が取る主語が属格で現れる。
(E) 従属節述語 GN, JQ は絶対格で現れる。
(E) 従属節述語 GN，JQ が取る自動詞主語は属格形である。
(F) 主節述語 GN, JQ は自動詞主語か他動詞目的語の標示を受ける。
(G) 主節述語 GN, JQ が取る自動詞主語は絶対格形である。

一方，GN, JQ が相互に異なる点（網掛け部分）は次のとおりである。

(H) 名詞項 GN は絶対格，場所格，道具格，与格，原因格を取れるのに対し，名詞項 JQ は絶対格と場所格しか取れない。
(I)　従属節 GN は属格主語を取るのに対し，従属節 JQ は能格かまれに属格主語を取る。
(J)　主節述語 GN は与格主語を取るのに対し，主節述語 JQ は能格主語を取る。

以上のように, GN と JQ には共通点が多い。一方, 相違点は (H)(I)(J) の 3 点のみである。しかしながら，この 3 点は GN と JQ の名詞化の度合いを測るのに重要である。すなわち，この 3 点から次のことがうかがえる。

動作主・被動作主名詞 JQ は，名詞の格標示，取りうる名詞項の格形式という 2 点から見

ると，動作名詞 GN よりも名詞性が低い。

第 1 節で述べたように，Comrie and Thompson (1985:334) は，動作名詞は動詞や形容詞の特徴を保持しているのに対し，主語・目的語名詞を含むそれ以外の名詞化（道具名詞，様態名詞，場所名詞，原因名詞など）は，統語的にはより名詞に近いふるまいをすると指摘している。しかし，このことが普遍的な事実ではないことは，以上から明らかである。

6. おわりに

本稿では，コリャーク語の動作名詞 GN と動作主・被動作主名詞 JQ の形態的，統語的ふるまいを記述し，両者の名詞化の度合いを相互に比較した。それにより明らかになった主な点は，次の 2 点である。

① 文法的役割から見ると，GN, JQ の名詞化の度合いは，いずれも主節述語＞従属節述語＞名詞項の順に高くなる。
② GN と JQ のこれら 3 つの文法的役割を全体的に見ると，動作名詞である GN の方が動作主・被動作主名詞である JQ よりも名詞化の度合いが高い。

最後にもう 1 点付記しておきたい。本稿で見た GN, JQ の主節述語としての用法は，両者が名詞化を経ることにより，名詞的な意味ではなく，動詞的なモーダルな意味を獲得していることを示している。このことで想起されるのが，日本語の「男ならそんな馬鹿なことはしないものだ」「明日は家で彼女の帰りを待つことだ」のように，「もの」「こと」などが形式名詞として一種のモーダルな意味をもつ，いわゆる「体言締め文」あるいは「人魚構文 Mermaid consturction」である（角田 1996, Tsunoda [ed.] 2013）。コリャーク語には，いわゆる人魚構文のように自立的な体言で終わる文は見当たらない。しかし，GN 接尾辞や JQ 接尾辞は人魚構文の体言に相当するような機能を担っていると考えられる。その意味で，主節述語 GN, JQ は「疑似人魚構文 quasi-mermaid construction」ともいえる文である。

略語・略号表

A=transitive subject	ABL=ablative	ABS=absolutive	ALL=allative
CAUS=causal	COM=comitative	CONV=converb	DAT=dative
DEF=definite	DU=dual	E=epenthesis	ERG=ergative
ESS=essive	FUT=future	GEN=genitive	IMPR=imperative
INF=infinitive	INSTR=instrumental	INTRJ=interjection	INV=inverse
IPF=imperfective	LOC=locative	NEG=negative	NML=nominalizer
O=object	PART=participle	PF=perfective	PL=plural
RES=resultative	S=intransitive subject	SG=singular	

参考文献

Bhat, D. C. Shankara (1994) *The Adjective Category.* Amsterdam: John Benjamins.

Chomsky, N. (1970) Remarks on Nominalizations. In R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar.* Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Comrie, B. (1976) The Syntax of Action Nominals: A Cross-Linguistic Study. *Lingua* 40:177-201.

Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic typology*. Oxford: Basil Blackwell.

Comrie, B. and S. A. Thompson, (1985) Lexical Nominalization. In T. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description.* Vol.Ⅲ: 349-398. Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.

Dixon, R. M. W. (2010) *Basic linguistic theory, Volume 2, Grammatical topics.* Oxford: Oxford University Press.

Givón, T. (2001) *Syntax: an introduction Vol. I.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Koptjevskaja-Tamm, M. (1993) *Nominalization.* London: Routledge.

呉人　惠 (2002)「コリャーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.

呉人　惠 (2008)「分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成」『北方人文研究』1: 19-41.

呉人　惠 (2011)「コリャーク語の名詞化ー動作主･被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1: 41-62.

Kurebito, M. (2008) Participial Relative Clauses in Koryak and their Typological Characterization. *Linguistic Typology of the North* 1: 29-42. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Kurebito, M. (2011) Agentive/Patientive Nominalization in Koryak. *Linguistic Typology of the North* 2: 87-104. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Kurebito, M. (2012) Adverbial Clauses in Koryak: Degrees of Subordination and the Five Levels. 『北方人文研究』5: 71-94.

Kurebito, M. (2013) Quasi-mermaid construction in Koryak. T. Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns.* (NINJAL Collaborative Research Project Reports13-01.). 649-666. Tachikawa, Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics.

Lees, R. B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations.* The Hague: Mouton.

Lehmann, C. (1988) Towards a Typology of Clause Linkage. In J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse,* 181-225. Amsterdam: John Benjamins.

Malchukov, A. (2005) Remarks on deverbalization. *Sprachtypologie und Universalienforschung*, 58:97-110.

Noonan, M. (1985) Complementation. In T. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic*

Description. Vol. II, Complex Constructions, 42-141. Cambridge: Cambridge University Press.
角田太作 (1996)「体言締め文」『日本語文法の諸問題』139-161. 東京：ひつじ書房.
Tsunoda, T. (ed.) (2013) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns.* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). 649-666. Tachikawa, Japan: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjakskogo jazyka.* Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Action Noun and Agentive/Patientive Noun in Koryak: with Special Focus on the Degree of Nominalization

Megumi KUREBITO
(Toyama University)

The present paper describes the morphological and syntactic behavior of action noun GN and agentive/patientive noun JQ in Koryak and compare the degree of nominalization with each other.

The result of the examination reveals that,

(i) GN and JQ share the following common features.
  (a) They both behave morphologically and syntactically similar to a noun. On the contrary they are used not only as the predicate of a subordinate clause, concretely, GN, as the predicate of a nominal clause, and JQ, as the predicate of an adnominal clause, but also as the predicate of a main clause expressing deontic meaning.
  (b) The degree of nominalization of both GN and JQ increases in the order of predicate in the main clause>predicate in the subordinate clause>argument.

(ii) Contrary to Comrie and Thompson's assertion (2004), the present research shows that the action noun GN is higher in the degree of nominalization than agentive/patientive noun JQ.

（くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp）